

受け継がれる城下町文化

難波の発祥の地～大江地区「北大江・中大江編」

流れが強く舟が寄りつきにくかった「難波」の発祥の地。港町として歴史の始まったこの地は、技術、教育、文化などあらゆる面で時代をリードしてきた城下町でした。戦災、経済発展で街並みが大きく変わっても、脈々と受け継がれるものがあり、今も庶民の暮らしが営まれています。

【中央区史跡文化事典】

に、詳しい解説があります。※本文中にも注釈で案内しています。中央区役所で配布していますので、ぜひ手に取ってご覧ください。



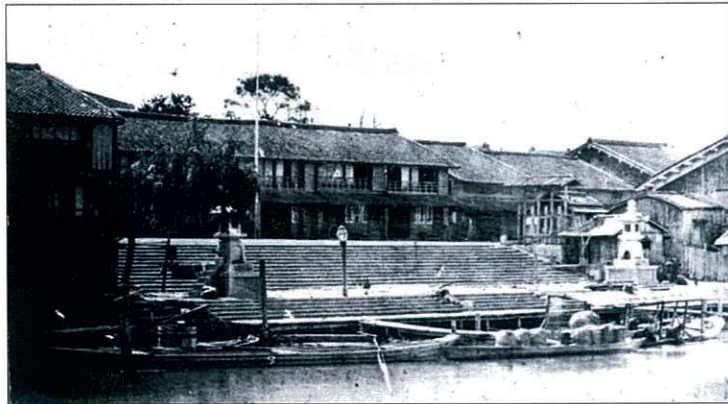
京都、大阪、そして全国へ 熊野街道の出発点

川から陸へと上がる熊野詣の起点の地は人と物が集まった結節点。その歴史は石碑だけでなく、個性的な地名にも刻まれています。

大江の岸、渡辺の津、そして八軒家浜へ

「生国魂神社さんの北門付近に石裂の大きな灯籠があります。その灯籠に、この地に宿屋が8軒あったことが書かれています。八軒家浜の名前の由来はここからきています」と語るのは、北大江で昆布店を営む八木さん(下写真)。八軒家浜は、近年、船着き場の整備やイベントが催されるなど、水辺のオアシスとして市民に親しまれる注目スポット。

でも、八軒家浜と呼ばれるようになったのは江戸時代に入ってからのこと。古来、この辺りは、生玉・天王寺方面に続く上町台地の西岸で「難波津」に面した「大江の岸」。平安時代頃からは「渡辺の津」。平安時代頃からは「渡辺の津」とよばれ、摂津国の国府が置かれ、政治と交通の要になりました。



かつての八軒家浜の様子。長さ約十七メートルの三十石船が行き交いにぎわった。「八軒家 船着場」(大阪歴史博物館所蔵)

熊野街道は「蟻の熊野詣」でにぎわった!

京都から熊野方面に参拝する際、淀川を船で下り、八軒家浜から陸路をたどることになります。15～16世紀には庶民による熊野詣が盛んになり、その光景は「蟻の熊野詣」と言われたほど、そろそろと熊野街道を歩んでいたとのこと。フィールドワークでは、天満橋京町3番にある「熊野かいどうの碑」を確認。その上に質問! Q「伏見から八軒家浜まで、下るのに何日、上るのに何日かかったでしょう?」「半日?」「3日間?」 答えは…A「伏見から下るのに約1日、伏見まで上るのに約2日」かかったそう。

熊野詣で最初に親ぎをするのは、第1王子である坐摩神社行宮(※)。境内には、「鎮座の石」という大きな石がまつられており、神功皇后が難波津で帰る船を待っている間に座った石だそう。石そのものが坐摩神社のご神体で、「やわらかく座りやすい石」とのことです(※「ガイドナビvol.3 西横堀川をたずねて」を参照)。この石は、地名の由来にもなっています。坐摩神社行宮辺りは「石町(こくまち)」という町名です。

まちを歩いていると、歴史の散歩道の舗装や、熊野街道の碑が見られます。御祓筋(おほらいすじ)とも言われた街道の熊野詣の情景が浮かんでくるかもしれません。



右▼歴史の散歩道の印
左▶熊野街道の碑

お城の正面「大手通」など由緒正しき町名

石町の他にも、城下町を感じさせる町名が残っています。元和5(1619)年、將軍秀忠により大坂の復興策として、伏見の町民に大坂への移住が命じられました。「伏見町」はその物語を伝えています。「鑓屋町」も江戸時代、伏見の町人が移住し、もとは「伏見鑓屋町」とよばれていました。「大手通」は大坂城大手門に通じることから、「平野町」は平野郷(現在の平野区)辺りから移り住んだと言われています。その他、江戸時代から残る地名として、「安土町」「淡路町」本町」「備後町」「博労町」などがあげられます。

地名は当時の政治や暮らしぶりを伝えるものとして、現在の私たちが歴史をひもとくヒントを与えてくれます。

水都大阪のシンボルへ

難波津、渡辺の津の時代、「天下の台所」と呼ばれた江戸時代、そして「東洋のマンチェスター」と称した近代に至るまで、水都大阪のまちは、縦横に開削された堀川から、どれほどの恩恵を私たちが受けたのかはかりきれません。川が育んだまち・大阪の歴史を見直し、今一度、水の都として再生する取組みが始まっています。

平成21(2009)年、「水都大阪2009」が開催され、八軒家浜に巨大なアヒルが出現したことも記憶に新しいでしょう。イベント以外でも、クルージングなどで、川から見たまちの姿を見、昔の熊野詣や水運のあった暮らしを見たい浮かべながら、楽しむことができます。



耳寄りばなし 釣鐘町の巨大な釣鐘

釣鐘町の由来となった釣鐘は、現存しています。さて、釣鐘町にはどうして釣鐘があるのでしょうか?

冬の陣、夏の陣の戦災からの復興中の寛永11(1634)年、将軍家光が大坂三郷の地子銀(一時代)を免除する措置を取りました。今という経済特区のようなもの。釣鐘はその措置に感謝した町民が協力して造ったものなのです。明治3(1870)年、時報の役目をしていた鐘は、大阪城内から打ち出す号砲が始まるまで撤去され、軽々とした後、府庁新築の際、屋上に移植。そして昭和60(1985)年、地元住民の協力や企業の土地の寄付・協力を得て、釣鐘の里帰り運動の結果、元の釣鐘町に戻ってきました。

現在では、「時の記念日」の餅まきや、大晦日の除夜の鐘など、地域のシンボルとしてまちを見守っています。

※【中央区史跡文化事典「大坂町中時報鐘」参照】



パレードは、地域の大人も子どもも参加し、沿道の市民にも見守られながら府庁から釣鐘町まで歩き、大坂にぎわいを感じながら、大坂町中時報鐘の歴史をたずねていきます。

人が集まり、人を育んだ 城下町を知る

時代をリードしてきた土木技術、教育施設、文化施設、遊興施設…。城下町に積み重ねられた財産を、今も垣間見ることができます。

町割りを今に伝える「太閤下水」

大阪のまちは、淀川・大和川の土砂で形成された平坦なデルタ地帯。雨水排水と多くの住人からの生活排水の処理が課題でした。東西横堀川に注ぐ下水網を建物の背中合わせになった場所に築いたことから「背割下水」ともよばれた「太閤下水」は、升目状の整然とした道路網とともにわが国の都市計画史上画期的なものとして評価されています。

現在でも、幅約2mの下水の上には建物が建てられておらず、フィールドワークでは、背割下水の上ではかなり遠くまで見通せることを確認。



太閤下水の説明する大浦さん。自宅建て替え工事の時は実物を見たとのこと

江戸時代の役所 ～東・西奉行所の変遷

奉行所は、役所と裁判所と警察署

元和5(1619)年、將軍秀忠は大坂を幕府直轄領とし、城主を置かず、大きな自治権を大坂に与える一方、大坂城を管理する城代や東・西奉行所を置きました。奉行所は今という役所と裁判所と警察署の役割を果たしていた施設。今は石碑しか残っていませんが、大坂城の西側に当たるこの辺りは、昔からの官庁街で、まちを支える人たちが行き交っていたのは、今も変わらぬ風景です。

※詳しくは【中央区史跡文化事典「大坂町奉行所」を参照】

大坂城の北側～東町奉行所

東町奉行所は大坂城京橋(現在の大阪歯科大学付属病院)辺りにありました。享保9(1724)年の大火で焼失しましたが、東町奉行所は元の位置に戻りました(右下図)。

商業の中心へ～西町奉行所

今の商会議所は、西町奉行所があった場所。明治に入ると奉行所は廃止され、「鎮台官所(軍司令部)」、「大阪裁判所」となり、まもなく「初代大阪府庁」となりました。明治8(1875)年に府庁の建物を改修して、「博物館」が開場、明治17(1884)年には「府立大阪博物館」と改称されました。

その後、隣地を取り込み、明治21(1888)年に美術館、明治36(1903)年には、珍獣展示スペース(動物園)もつくられました。大正4(1915)年、天王寺公園の「市立動物園」が開業するまでの間、ここで様々な動物が見ることができていたことは、想像もつきません。動物園移転に伴い、ぞうは、この地から松屋町筋を歩いて天王寺に向かって歩いていったとのこと。



(右)当時のぞうの写真-竹田さん提供

世界に羽ばたくビジネスマンを育成

商会議所は、世界に羽ばたくビジネスマンを育成した「府立貿易専門学校」の発祥の地でもあります。戦後、不足していた貿易マンを養成するために昭和23(1948)年「府立高等貿易講習所」が開校されたことがきっかけ。ここから大阪を発展させていく商人が生まれたのです。この学校は現在の開明高等学校の前身。

また、商会議所の敷地南側では、3体の立派な銅像が目をはきまします。通常局に通天閣、映画館。大阪の名所や、文化産業の生みの親なのです。



五代友厚

天保6(1835)年鹿兒島生まれ。明治元(1868)年、新政府の外国事務裁判事に大阪に赴任。通帯寮(元通帯局)の誘致や、今の大阪商会議所の設立に関わる。

土居通夫

天保8(1837)年、宇和島生まれ。明治維新後、五代友厚の勧めで、大阪電灯会社を起し、現在の関西電力に至った。大阪商会議所の第7代会頭に就任。明治36(1903)年の第5回内閣勲章博覧会の大坂誘致や、エッフェル塔視察後、通天閣建設と博覧会を成功に導いた。

稲畑勝太郎

文久2(1862)年、京都生まれ。フランスから染料・染色機械を導入し稲畑染料店(現「稲畑産業」)を始めた。日本の軍服をカーキ色にしたのは彼による。3度目の渡仏でシネマトグラフの配給権の許可を得て、日本で初めて映画を上映させた。



後ろは大川。門は東(絵図右)の大坂城側に面しています。大坂東町奉行所絵図(一橋大学付属図書館蔵)

人づくりを支える教育・教養施設が集まる

江戸時代、城下町だったこの辺りは、武士のたしなみとして、能楽が発展しました。現在中央区には、「大機能楽堂」と「山本能楽堂」の2つの能楽堂がありますが、これは大変珍しいことです。

大坂城があったことから、政府関連の施設が多いことも特徴の一つです。大阪府警察本部の南側には、日本初の理化学学校「警密局(せいみやく)」が、現在の追手門学院には、「信行社(陸軍幼年学校)」がありました。

現在、府庁の近くには日赤大阪支部、大阪法務局がありますが、そのような歴史を知れば、そうそうたる施設が集まることも合点。

谷町2丁目交差点南東角には、「大阪英語学校跡」の石碑があります。ドーンセンター(府立男女共同参画・青少年センター)は、昔は大手前国民会館といわれ(毎日会館といわれた時期も)、市民の文化的な活動を発表する場でした。当時の様子を知っている方の話によると、和式トイレしかなかった時代に洋式トイレがあったり、バレエの発表会が行われたり、当時としてはモダンな雰囲気を感じられたとのこと。

時代とともに建物が建て替わっても、まちとしての公的、教育的、文化的な育成機能は引き継がれていることがよくわかります。

府庁本館は映画のロケにも使われた名所

大阪城天守閣と対するように建つ大阪府庁本館は、大正15(1926)年竣工で、現役の都道府県庁舎では最も古い建物。映画のロケにも使われている貴重な建物です。

松田優作さんの遺作となったアメリカ映画「ブラック・レイン」(1989年)や木村拓哉さん主演のドラマ「華園なる一族」(2007年)、映画「HERO」(2007年)、NHKドラマ「白洲次郎」(2009年)など、多くの作品の舞台となりました。

平成23(2011)年初夏に公開予定の「プリンセスヨトミ」では、大がかりなロケが行われたとのこと。

※【中央区史跡文化事典「大阪府庁本館」を参照】

■「大阪ロケーション・サービス協議会」は平成12(2000)年に設立された日本初のフィルムコミッション。撮影協力した作品を中心に大阪のロケ地をホームページで紹介しています。観光やまち歩きなどの参考に一見の価値あり! また、ロケ施設の紹介、撮影許可交渉の代行、ボランティアエキストラの募集なども行っています。

http://www.osaka-fc.jp/

変わる街並み。。。でも 心意気は今も健在!

時代を先導してきたこの地は、経済発展、そして戦火を受け、大きく様変わり。しかし、引き継がれるものや新たな取組みも...

まちが様変わりした戦前、戦後

「私の祖父、親、自分、子ども、孫、ひ孫も同じ小学校に通ってました」と語る中大江西部地区まちづくり研究会の加藤さん。「今の難波宮跡にあった第8連隊の存在が大きかった。谷町筋は、軍服の洋服屋や裏地屋さんが多く、自分の家業も兵隊さんの水筒の検を売っていました。軍事関連の木造2階建てのお店が多かったです。また、「戦後はまだ低い建物が多かったの、自宅付近から府庁が見えていました。昭和34(1959)年に枚方市に被服団地ができ、谷町筋沿いの既製服店のほとんどが移転」。戦前戦後、戦後復興期、そして現在と大きく3つに時代を区分し、お話し頂きました。

同じ研究会の会長の岡さんも、「銭湯が多く、昭和35(1960)年頃までは住み込みのぼんさん(住み込み従業員)もいた賑やかなまち。現在の北浜郵便局のところには、進駐軍の憲兵軍本部がありました。島町から釣鐘町にある日限(ひぎり)地藏辺りまでの一帯には進駐軍のソフトボール専用グラウンドがあり、ブルドーザーで土をならして、なんと2日間できたんですよ」と、当時の様子を懐かしそうに語りました。



左:加藤さん 右:岡さん

瓦礫の上に造られた中大江公園

中大江公園は少しこもりしています。なぜ? 実はこの場所は、戦災直後、残骸が積み重なり、道路も一緒に埋もれ、東西の道が途切れた状態になっていました。区内で大阪城公園に次ぐ大きな公園は、西隣の中大江小学校とともに道路をなくしてつくられたのです。

大きなすべり台が子どもたちに人気の公園は、春の桜祭り、夏の生国魂夏まつりや盆踊り、冬のエコクリスマスなど、季節のイベントや住民と企業が参加した清掃活動などを通じて親しまれています。



大人も子ども、真剣でまた楽しい。毎年行われている桜まつり茶会。祭り、毎年参加したくなりませぬ。抹茶、桜餅の賣る人も

山本能楽堂

「オフィス街に佇む能楽堂」

徳井町の道から扉を開けると、周辺からは想像できない昭和の香りが残る異次元空間が広がっています。舞台の床は黒光りし、どっしりとした重厚感があります。音響効果をよくするため、舞台上には大きな鞆(かめ)が12個並べられているとのこと、実際見学させてもらいました。現在新しくつくられる舞台には鞆を埋めることも少ないので、今では珍しいとのこと。

「地域に根ざした活動」

中大江公園での桜祭りでの演能のほか、初心者の人や子どもたちも楽しめる講座やサロンが行われています。気軽にのぞいてみてください。見学も歓迎とのこと。舞台上の鞆も見られるかも。

移築後は村役場となった旧中大江小学校

中大江小学校の玄関に、素敵なレリーフ(飾りタイル)があります。これは、かつて木造の旧中大江小学校で使われていたレリーフなのです。

昭和2(1927)年、旧中大江小学校の木造校舎は、玄関周りの建物の一部が日根野村(現在の泉佐野市日根野)に運ばれ、日根野村役場となりました。当時、村中の大工が総出で組み上げたそうです。

その後、泉佐野市役所日根野出張所、日根野ブックステーション等、まちのコミュニケーションの場として活躍。しかし、建物の老朽化に伴い、解体されることに。何とか保存したかった有志が協力し、現中大江小学校の一部保存されることになりました。レリーフのほか、1階廊下には、木造棟部分の大きな木材がそのまま展示されています。

大阪から日根野、そしてまた大阪へ。地域で愛されつづけた旧中大江小学校の証します。

右:旧中大江小学校



下:校舎内に保存されている旧小学校の木造の棟部分

北大江でのまちづくりの取組み

北大江での取組みの中で人気イベントの一つは、毎年秋に行われる「たそがれコンサートWeek」。北大江地区まちづくり実行委員会が主催する北大江公園ライブは、金曜日夕刻、会社帰りのサラリーマンや近隣住民に配慮した時間帯に開催。実はこの周辺、楽器製作のお店や音楽関連の会社が多いとのこと。楽器工房の紹介もあり、1週間、まちのいろいろな場所で身近に本格的な演奏が楽しめるとのこと、遠方からも聴きに来る人も多そう。

まちづくり実行委員会は、コンサートのほか、自主防災活動や高麗橋線(大阪合同庁舎1、3号館の南側道路)の拡幅事業などにも取り組んでいます。 ■北大江地区まちづくり実行委員会 <http://kitaooe.cocolog-nifty.com/>



音楽を楽しむために多くの人が集まります!



(上)2階席から見る。建物も、「市街地にある3階建ての木造建築で、伝統的な能舞台を持つ」ということで「国登録有形文化財」に

(左)子ども向けの能体験イベント 写真:おつかひろふみ

■山本能楽堂 <http://www.noh-theater.com/index.html> 電話:06-6943-9454 住所:中央区徳井町1-3-6